

MfG_J_Unchou_in_Eirin-ji_temple



越後堀之内・永林寺の雲蝶彫刻

2022年5月、2023年5月改訂
春日

目次

1. 高田藩松平光長らの香華所となった理由
2. 寺に似つかぬ天女を彫った理由
3. 解けたようで、まだ解けぬ疑問
4. ミニ発見
 - (1) 本寺の林泉庵は、上越の林泉寺ではなかった
 - (2) 北斎の画風を見つけました
 - (3) 門前の「鮭を含む四文字」の意味が分かりました
 - (4) 感想のまとめ
5. 「寺社装飾は、絵解きに価値がある」

1. 高田藩松平光長(1615～1707)らの香華所となった理由

高田藩の飛び地だったことが遠因。

元和元年(1615年)、北荘藩主松平忠直の嫡男として越前北荘(福井)城にて誕生。母は将軍徳川秀忠の娘勝姫。

一時、光長が高田藩主であり、且つ晩年に養子が初代津山松平家当主となったことで、三つ葉葵の紋章も許され、津山松平家より拝領の和幡が本堂内を荘厳することにつながる。

1674年、高田藩の越後騒動。 そのため、数年後、高田藩は改易となり、光長は伊予松山藩へ配流となった。

永林寺の彫刻群は、悲運の藩主を慰める意図があった。

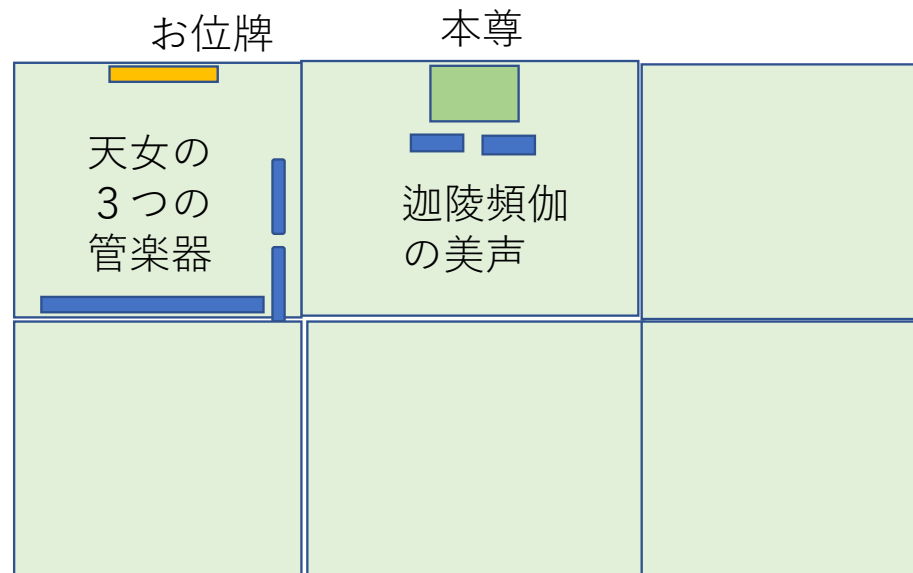
2. 寺に似つかぬ妖艶な天女を彫った理由

「永林寺の欄間に天女を彫ってほしい」というのが、
弁成和尚の最初のお願いだったそうです。
その目的が、安置した松平光長ら御位牌への慰めのためと
わかりました。

今まで本で写真を見ていて、天女の妖艶さばかりが
目について気づきませんでした。まさに美しい音楽で
満ちたお浄土です。
2022年、新潟県立近代美術館で展示された宇治平等院の
奏楽天女の群像と同じ考え方であり、浄土を表わしても
いるのです。

本尊の釈迦如来、お位牌のふたつの部屋は、お浄土の音楽空間。(雅楽は世界で最初のシンフォニー、そして美声)

天女がもつ、3つの管楽器、縦笛の篳篥(ひちりき)、横笛の龍笛(りゅうてき)、17本の竹管からなる鳳笙(ほうしょう)。



迦陵頻伽(かりょうびんが)とは、極楽にいて美しい声で鳴く、上半身は美女、下半身は鳥の姿で、その美声を仏の声の形容とする。

本尊の前を莊嚴する迦陵頻伽(かりょうびんが)

極樂にいて美しい声で鳴く、上半身は美女、
下半身は鳥の姿で、その美声を仏の聲の形容とする。

迦陵頻伽について シルクロードの響き、(山川出版社2002)より

迦陵頻伽とは元来古代サンスクリット語の鳥の名前の音訳である。雀、あるいは夜鴛を指していると考えられ、美しい声で鳴くことから仏の声にたとえられこともある。また、極楽浄土に棲む人面鳥身で腕があり、楽器を持って音楽を奏で、良い声で法を説くものといわれる。

アフガニスタンのバーミヤンの近年破壊された大仏像の背面にも、迦陵頻伽像を見ることができるが、インド本地ではこの図像は見受けられない。・・・七世紀初め頃の敦煌壁画の中の阿弥陀浄土変相図には、極楽浄土を象徴する図像として多く出現しており、これ以後の中国仏教美術では多用されている。わが国でも、多くの寺院の浄土変相図には仏教の理想的世界で仏を荘厳する姿が見られる。 ～ シルクロードの響き展_2003新潟県立歴博の関連出版

佛説阿弥陀經に見られる、迦陵頻伽

佛説阿弥陀經

姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

如是我聞 一時佛 在舍衛國...

復次舍利弗 彼國常有 種種奇妙 雜色之鳥 白鵠孔雀 鸚鵡舍利 迦陵頻伽

共命之鳥 是諸衆鳥 晝夜六時 出和雅音 其音演暢 五根五力 七菩提分

八聖道分 如是等法 其土衆生 聞是音已 皆悉念佛念法念僧

『阿弥陀經』

また次に舍利弗よ かの国には常に種々の奇妙なる雑色の鳥あり。
白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。この諸々の鳥昼夜
六時に和雅(わけ)の声を出(いだ)す。その声 五根・五力・七菩提分・
八聖道分かくの如き等の法を演暢(えんちょう)す。その国の衆生この
声を聞きおわりて皆ことごとく佛を念じ 法を念じ 僧を念ず。

極楽浄土の迦陵頻伽と共命鳥



極楽浄土の迦陵頻伽と共命鳥(ぐ
 みょうちょう)。『阿弥陀経和訓図
 会』(1864年刊)の挿絵

迦陵頻伽



佛説阿弥陀經に見られる、迦陵頻伽(続き)

白鵠は白鳥、コウノトリ

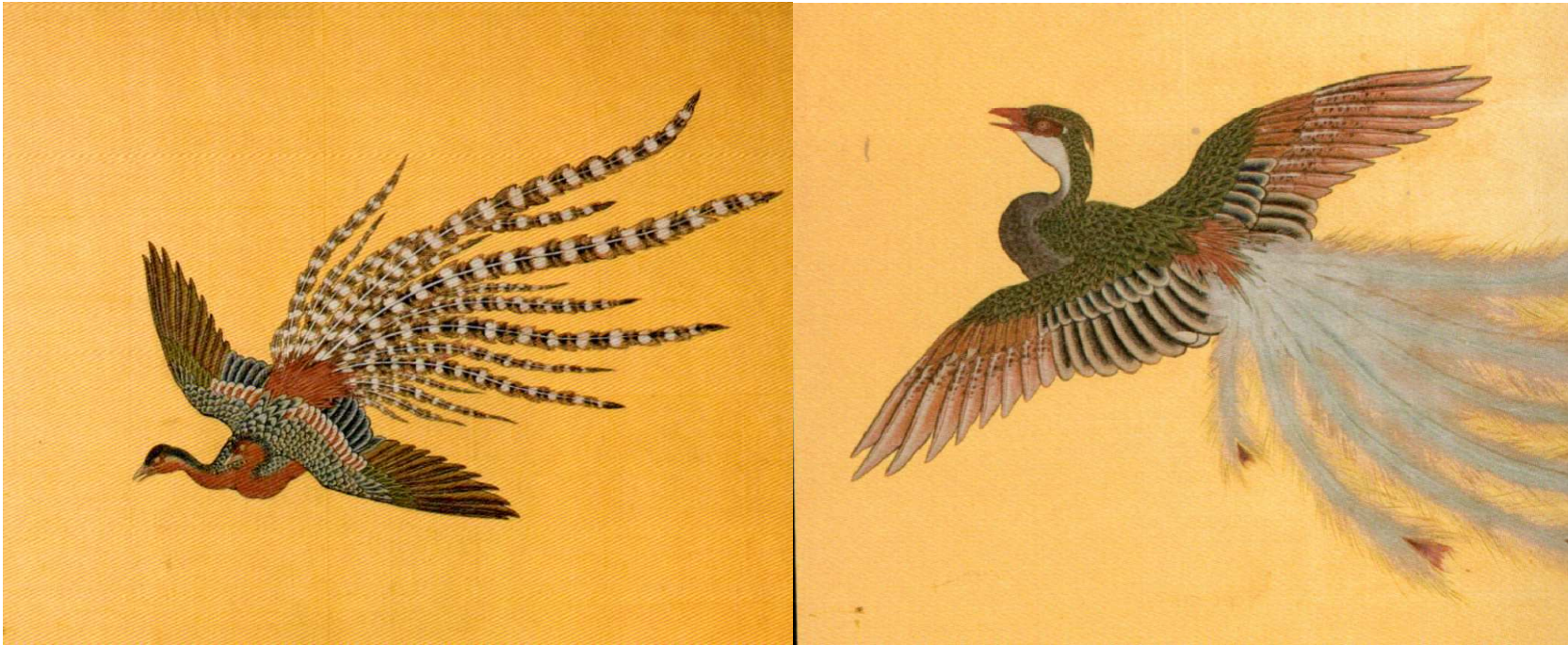
舍利は九官鳥の一種

(百通りの言葉を真似て理解することができるという) 九官鳥の一種ともいわれ、人間の言葉を真似することができる鳥の名。

永林寺の本堂に孔雀が彫られているのも、極楽に棲むという鳥だからなのだと、わかりました。

共命鳥(双頭の鳥)

迦陵頻伽か



望月玉泉「安養六種図」(1895)より (京都 東本願寺蔵)

ちなみに、お浄土は仏国土

阿弥陀如来の西方極楽浄土、

釈迦如来の靈山浄土

薬師如来の東方浄瑠璃浄土

そのほか

観世音菩薩の補陀落浄土

毘盧遮那仏の蓮華蔵世界

阿閼如来の東方妙喜世界

大日如来の密厳浄土

弥勒菩薩の兜率天

～ 本堂に、本尊の釈迦如来
～ 位牌堂に、薬師如来

3. 解けたようで、まだ解けぬ疑問

たくさんある鳥の彫刻に見とれてしまいまして、本堂全体の彫りものについて、何かテーマがある筈と考えていると、拝観時間が足りませんでした。

弁成和尚の指示を仰ぎ、相談しながらの絵柄ですから、天女のように、仏教的な意味、人々への祈りを意味があると思うのですが、全体としては謎のままです。何回か訪問させてもらわないと、わからないようです。以下に、雲蝶彫刻の代表的な三寺院の彫り物の主題、目的について、世上で云われていることを、整理します。

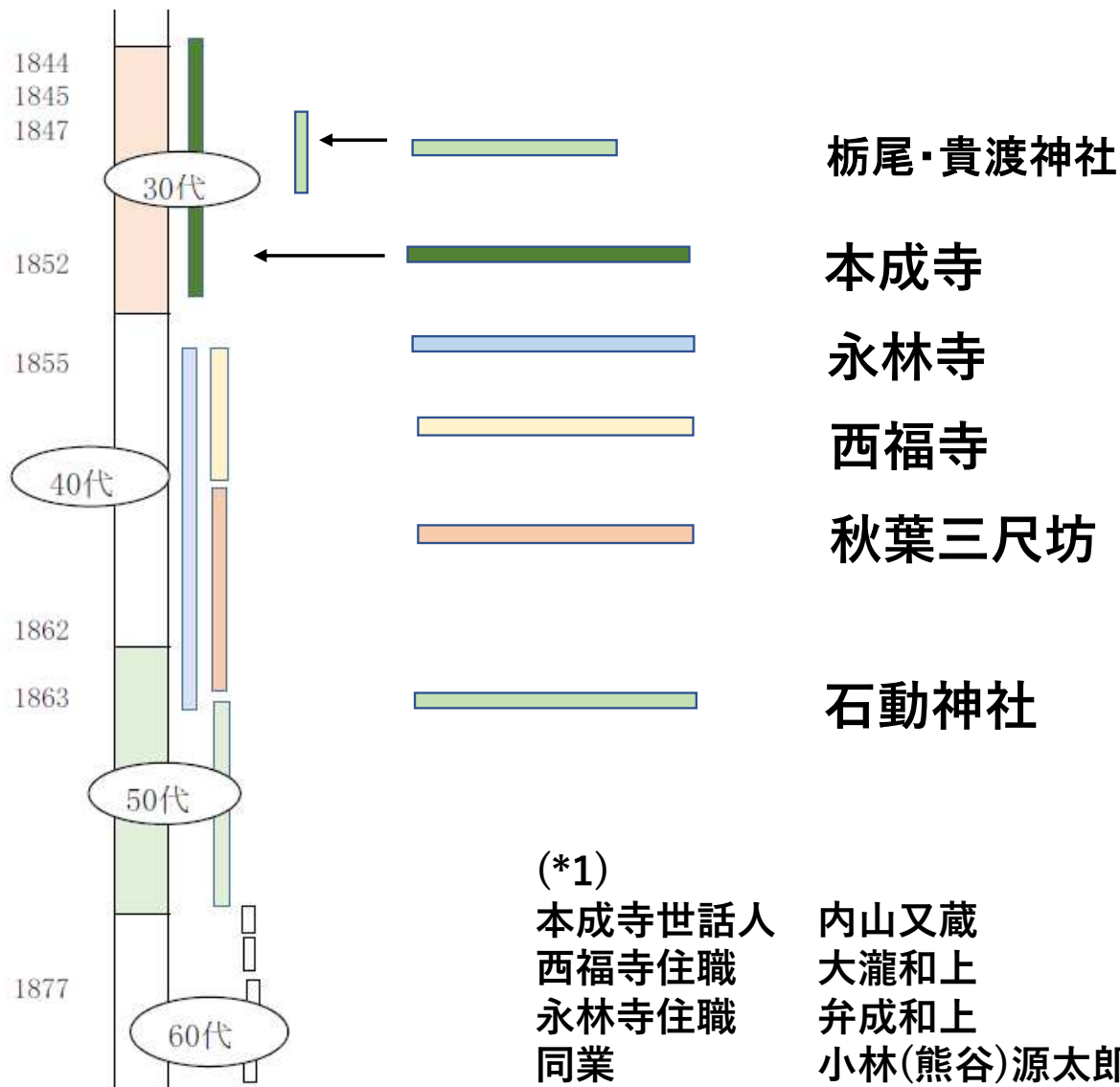
三寺院の彫り物の主題、目的(恐らく、というレベル) 依頼主により、少しずつ異なっている	
本成寺	塔頭の向拝に見られる、寺院の荘厳 ～そのほかに何か、あった筈
西福寺	住民の幸せを祈り、仏法をひろめよう 始めの仁王 洪水禍を鎮めるための祈願 道元の図 苦しい生活の住民に与楽の祈願
永林寺	お浄土を本堂に再現 始めの天女の浄土は、光長らに対する慰霊 本堂と廊下の境に龍や麒麟で仏を守護 ～そのほかに何か、ある筈

三つの寺院の雲蝶の彫り物のはじまりは、異なっていますが、いずれも仏法弘布がベースのようです。

みな頼まれた仕事ではありますが、20年もの間、稀代の天才が没頭した仕事ですので、雲蝶自身の、心に秘めた共通の意義もあって然るべきと考えます。

それが何か、探したいと思います。

もしかしたら、魚沼を含む越後中越の随所に残る作品の全てを考える必要があるかも。



中心人物(*1)との対面
いつ、どのように

依頼の受け方
本人の気持ち

仕事の進め方

それぞれに
ストーリー

それぞれの施主の、それぞれの祈願

+

それらに応じながら、雲蝶自身の心に秘めた共通の意義

枳尾の貴渡神社の絢織と十二支の繊細な彫刻は、
少し異質かも知れませんが、これまた、素晴らしいです。
年表図にあるように、若い時の作です。
木彫りの良さが存分に発揮されています。

4. ミニ発見

(1) 本寺の林泉庵は、上越の林泉寺ではなかった。

同じ魚沼の林泉庵が本寺。

林泉庵は、小出ICの東、西福寺の北にあたる。

(新潟県魚沼市干溝1464)

魚沼一帯は、銀山で栄えたことも、あったようです。

永林寺 (新潟県魚沼市小屋1765)

西福寺 (新潟県魚沼市大浦174)

(2) 北斎の画風を見つけました

木彫の波も類似していますが、
少し違うように思いました。
むしろ、下図の流れ落ちる滝に、
一瞬静止した水を感じました。
もしかして、「これこそ北斎からの
学びでは」と思った次第です。



以前にプルシャンブルーで
お話した、北斎の滝図



北斎ブルー 「諸国瀧廻り」(1833年)



(3)門前の「鮭を含む四文字」の意味が分かりました

「雪里の人々、魚野川の鮭を肴に、交わる」では、
なかったです。

魚へんがグンと伸びているのは、魚へんを共通に
鮭鮫鱒鯉ということで、「酒、さめたら来い」。
さかなを使った、四文字の掛け詞ということで、
「葷酒山門に入るを許さず」を云ったものだそうです。

永林寺編 福德一語一会 より



永林寺 門前の碑文

(4) 感想のまとめ

それにしても、凄い、そして美しい彩色彫刻群でした。特に、多くの鳥たちの、ノミの冴えと色彩の美しさは格別でした。

1) 色彩・配色

西福寺の「道元禅師猛虎調伏之図」の配色の技と異なっていますが、これは画面の大きさの相違によるもので、後から作成の永林寺の配色が勝っているというものではないと考えます。

西福寺、永林寺の彩色の対比の一例



にいがた観光ナビ より

2) 多様な鑿（ノミ）について

香炉台・灯籠台を飾る邪鬼や獅子の、「彩色」も凄いですが、一木による、深い「透かし彫り」は、ありえないほどの技巧でした。

三条は、鑿（のみ）を始め金物類一式の一大製作地であり、雲蝶を三条に招聘した内山又蔵も、この金物を商いとする、本成寺の世話人でもありました。

これが縁で、あり得ない透かし彫りの妙技の具体化に必要な特殊な形状の鑿も、容易に調達できたと予想します。

いくつか現存する石の牛も、江戸の職人仲間の垂涎の的である、この切れ味抜群の鑿の入手ルートがあつたからこそ、と考えます。

5. 「寺社装飾は、絵解きに価値がある」

「寺社の装飾彫刻」（日貿出版社2016）のなかの、
佐藤秀治さんの執筆部分、
「越後江戸彫り（源太郎、雲蝶）」の説明に、
絵解きにこそ価値がある、という言葉がありました。

『鑑賞は一言でいえば「絵解き」である。
彫りは成形の手立てで副次的なもの。
優れた彫技のみに気を取られずに、
「絵解き」に参加してナンボという世界。』

その通りだと思います。2章に述べた、願主の「安置する
松平光長ら御位牌への慰めのため」を理解しないと、
この壮大な彫刻が意図する世界の意味に気づかない。
「ただ、豪勢」で終わっては、もったいない。

“感動は、心の栄養”

美は細部に宿る、という言葉もあります。
雲蝶さんは、大彫刻に対しても、細かなところに
気を配っている筈です。

西福寺の「道元禅師猛虎調伏の図」も、うんと
拡大すると、また違った世界が見えるような気が
しています。

堂内に拡大写真を設けると、また新たなストーリーに
気づけて、おもしろさが倍加すると思っています。

